

日本天文学会 早川幸男基金による 渡航報告書

去る 2000 年 8 月 5 日から 19 日の間、早川幸男基金を利用して、イギリスはマンチェスターにて開催された IAU XXIVth General Assembly に参加してまいりました。

マンチェスターはロンドンから 300 キロメートル程北にある古い工業都市で、世界初の鉄道が開通した街として有名です。今回の IAU は、University of Manchester をメイン会場として、その歴史ある建物群に囲まれての開催となりました。

2 週間の日程の中で多数のシンポジウムやジョイントディスカッションが開催されましたが、私はその中の Symposium 205 “Galaxies and Their Constituents at The Highest Angular Resolutions” でポスター発表を行なった他、様々な講演を聴講する事が

出来ました。私が発表した Symposium 205 では、「高角分解能」な世界で見て来る様々な天体現象について、理論・観測の別に捕らわれず分野横断的に議論されました。

私自身は星形成現象に興味を持ち、数値シミュレーション等を用いた理論的研究を行なっています。今回のポスター発表では、非常に高い外圧によって外から押えられた星間分子雲の「圧縮層」が、自己重力不安定の非圧縮モードによってどの様に進化するかを、数値シミュレーシ

ンを用いて解析した結果を示しました。このような現象については、銀河中心付近などの大質量星の形成領域で高外圧に起因すると思われる観測結果が得られたとの報告もあり、理論的な説明が急務であると言えます。

実際に現地でシンポジウムに参加し発表やざつくばらんなディスカッションをした事は、非常に有意義な経験でした。それは、今まで交流の無かった方々と接して海外の研究の動向を肌で感じる事が出来た事、ポスター発表や関連論文の配布を通じて私自身の研究を広く知らせる事が出来た事等、情報の発信受信両方の意味で言えます。特に外国の研究者の方の話を聞いていると、身近で耳にする方とはまた違った観点での説明や、発表の筋立ての違いを感じる事もあり、大変興味深いものでした。

研究関係以外にも様々な体験をしましたが、常に感じた事は英語力の必要性でした。言葉のハン

ディキャップは日頃より避けて通れぬ問題ではありますが、フォーマルな講演時の聞き取りから日常のやりとりまで、すべてにおいて緊張と集中を強いられるのは、海外での研究会ならではの事でしょう。

大きな収穫と新たな反省、一言でいうとそんな二週間でした。

最後になりましたが、今回この貴重な機会を与えて下さいました、日本天文学会及び早川幸男基金に関係する皆様に、厚く御礼申し上げます。

梅川通久 (千葉大学)



市長主催！の歓迎パーティの待ち時間に1枚。